

・はじめに

考古博物館が動き始めて2年が経った。1年目より2年目が、「2年目のジンス」で色々な意味で難しいと言われる。それは入館者数の逡減化の問題より、業務の日常化と經常化を如何に図るかの問題の難しさが一番だと思う。

入館者数について言えば、より快適かつ安定した環境で見学してもらうためには、当館の展示室面積からして10～13万人程度が最適と考えられるので、その点ではむしろ望まれたことである。

むしろ、問題としたいのは、業務の日常化・經常化に伴う事業の後退・停滞である。あるいは、創造性の欠如である。維持は、後退である。言い換えれば、建設・開館までは、新たな館としての出発に向かって傾注された創造性が、組織・体制の安定のために削かれ、悪しき習慣性が生まれることである。果たして、高い水準で日常化・經常化を果たし得たのであろうか。自問すべきである。

・常新展示とシンポジウム等

特別展として、春・秋2回開催した。

春は「大地に根づくころ」と題して、縄文時代草創期から早期までを中心として、鹿児島県上ノ原遺跡の重要文化財を含む展示品を中心に、南九州にいち早く咲いた早熟な縄文文化をテーマとして展示を展開した。シンポジウムでは、木村幾多郎氏（大分市歴史資料館館長）をコーディネーターとして、「南九州の初期縄文文化」について論議した。

秋の日韓交流展は、「海を渡った日本文化」として、「列島弧から朝鮮半島へ」という方向での文化交流を、近年注目された調査成果である丹芝里遺跡（公州市）の速報を中心として構成した。ただし、丹芝里遺跡の本報告がまだ行われていないこと、また韓国国立中央博物館が秋に開館を控えていたことなどから、韓国内から展示品を借用することが出来なかった。そこで、国立歴史民俗博物館をはじめとする国内機関が所蔵するレプリカや関連資料によって展示を構成したが、それでも充実した展示を行えたことは、貴重な経験になった。開期中に開催したシンポジウムでは、朴天秀氏（慶北大学校）をコーディネーターとして、韓国内の最新の考古学情報をもとに論議した。

また、企画展は、本県の中心的な収蔵資料である地下式横穴墓出土の鉄製品と古墳時代人骨を取り上げたはじめての企画とした。夏は「地下式横穴墓が残したものⅠ-鉄」、冬は「地下式横穴墓が残したものⅡ-人骨」である。共に開期中に講演会とワークショップを取り入れ、「鉄」では高妻洋成氏（奈良文化財研究所）、「人骨」では竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）の協力を得て、より身近にそれぞれのテーマに接近することが出来たと考える。今後も、同テーマでの企画展は、本県の考古学水準を示す上で欠かせないものとして周期的に開催することになるであろう。収蔵・保管・管理・調査・研究・展示というサイクルは、資料を将来へ引き継ぐと共に、現代社会への還元・活用という循環を形成してこそ、初めて博物館としての機能と責任が果たせることになるのは言うまでもない。

こうした特別展・企画展の開催を挟む一月ほどの期間には、それぞれの予習ないしは復習といった位置付けで、「食を考える」「埋葬の方法」「古代の運搬」「縄文人と弥生人」「土器の紋様」といったテーマを掲げて、新しい情報の提供を行った。

・講座と少年団

講座は、考古学の基本について座学を中心とする「考古博講座」と、体験的な内容を中

心とする「体験講座」として実施した。

考古博講座は、「遺跡発掘の謎」「縄文の魅力」「弥生の魅力」「古墳の魅力」「土器の装飾」のテーマで5回開催した。各時代の基礎的な情報の発信と共有化が行えた。体験講座は、野外活動として「古墳めぐり」を2回、考古学体験として体験発掘と写真撮影の2回、古代体験として大型縄文土器づくりなどを開催した。特に前者は、従来結論だけを受け止めていた受動的な視点から、考古学の実際を通して、研究者と同じ能動的な視点から考古学の世界を見ることに繋がるであろう。少年団の活動は、15人の団員が、炉穴や集石石蒸しによる古代食の調理など、実体験をとおして古代人の生活の知恵に触れることが出来たと考える。

「イワクラ（磐座）学会全国学術大会2005」がホールを会場として開催され、全国からの参加者があった。また、高見乾司氏（森の空想ミュージアム）の主催で「九州の民俗仮面展」がエントランスホールで行われ、併せてフォーラム「民俗仮面が語る古代史」もホールを会場として行われた。

その他、地元のグループによる琴の演奏会や考古博の友の会での茶会などが、エントランスホールで開催された。多様多彩な入口から、考古学や歴史への興味関心を繋ぐきっかけになればと思う。

・調査・研究

発掘調査は、継続して46号墳、81号墳、111号墳、170号墳を行った。この内、81号墳は柳沢一男氏（宮崎大学）が調査主体となり、170号墳は犬木努氏（大谷女子大学）との共同調査として行った。

81号墳は、西都原古墳群の開始期の解明を目的とした初期前方後円墳の調査である。また、170号墳は、大正時代の部分的調査から、全体像解明を目的とした再発掘調査である。81号墳については、正式な報告書の刊行を待つしかないが、出土土器の編年観が問われるところであろう。170号墳については、従来169号墳出土とされていた、重要文化財子持家形埴輪・舟形埴輪のものと考えられる埴輪片の出土が確認され、170号墳出土であったことがあらためて認識されたことは、大きな成果の一つであろう。

46号墳は、第1古墳群最大の前方後円墳で、男狭穂塚・女狭穂塚の直前の時期の築造と見られるが、墳丘の2箇所盗掘坑と見られる空洞が口を開けていることから、墳形等を確認の上、安全対策も含めて保存整備を講じること目的としている。前方後部・後円部ともに3段築成であることが確認された。

また、111号墳は4号地下式横穴墓の墳丘であるが、墳丘中にも埋葬施設が存在することが確認された。掛甲が既に露出し、保存処理の必要性や、埋葬施設を持つ墳丘の整備方針を検討するための基礎資料を整えるためにも、発掘調査を行った。結果、墳丘中に埋葬施設を持つ地下式横穴墓の位置付けは明確になったが、地下式横穴墓と墳丘中の埋葬施設との関係の理解などは、南九州の古墳時代を解明する上で欠かすことのできない資料であることから、その成果は重要な意味を持っている。

男狭穂塚・女狭穂塚の地中探査は、2ヶ年目として、レーダー探査に加え、牛島恵輔氏（九州大学）らの参加を得て電気探査も行った。本年度は、男狭穂塚の「前方部」の前端部の確認を中心に、女狭穂塚と男狭穂塚の周壕の重なりなど、昨年度より探査対象範囲を2倍ほど広げて実施した。

・学校教育・生涯学習

本年度も、学校関係や生涯学習関係での利用が盛んに行われた。博物館学芸員実習を受け入れ、成果の具体化として、展示の一区画を実習生の企画によって構成した。

ボランティア・スタッフの活動も範囲を広げ、また深化している。これまでの展示解説

や史跡案内に加えて、副読本や年表などの解説資料づくり、また史跡見学のパンフレットづくりも動き始めた。また、秋に開催した日韓シンポジウムに関して、開催時の図録・資料集に加えて、シンポジウムの記録化をテープ起こしから専門用語を含む原稿整理等を行い、書籍化を進めている。こうした活動こそ、生涯学習の実践と言えるであろう。

最後に、図書については、西谷正氏（伊都国歴史博物館）、西村康氏（ユネスコ・アジア文化センター）から継続して蔵書を寄贈していただいている。さらに、新たに蔣尚勳氏（韓国国立中央博物館）から1,100冊を超える韓国内の発掘調査報告書を寄贈していただいた。日韓交流を大きな柱とする本館にとって、貴重な蔵書の蓄積となった。

（北郷泰道）